様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２１９８

研究課題名（和文）江戸時代における地域文化リーダー析出ツールとしての「狂歌」の総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study into the use of kyoka as a tool to uncover regional cultural leaders in the Edo period

研究代表者
高橋　章則（Takahashi, Akinori）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：１０１８７９９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代の地域文化を考察の有効史料として「狂歌」を取り上げ、研究成果を史料が好条件で所蔵される欧州の機関と共有することを課題とした。「狂歌」の史料性を重視したのは、①「狂歌」が幅広い教養の上に立って作成され、②作者たちが全国的なネットワーク（連）を通じて地域に多用な人的・物的資源をもたらし、③その痕跡が諸種出版物の上に現れ、④狂歌作者自身と末裔たちが江戸期の「知」的資源をもとに近代の地域文化の担い手となった、と見られるからである。
多岐にわたる「狂歌」史料の文化的な意義の認知度を高め、海外の所蔵先等と広く意義・活用法を共有し、日本文化研究の新局面が創出する点に研究意義がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究の期間中は、学術的な指針を得ることが可能な地域を選択し調査に赴き、得られた史料の概括的な整理と必要な基本文献の整備に努めた。その主たる調査は甲府市・上越市で行い、基本史料の確保は国文学研究資料館を中心に行い、研究報告を兼ねた講演を仙台市（東北大学東北アジア研究センター）・上越市（三和区神田富永邸）などで行った。
また、研究の開示と今後の共同調査（書籍目録作成を含む）を前提とした打ち合わせを山東大学（中国）との間で持つなどして、狂歌人の遺した多岐にわたる「狂歌」史料の文化的な意義の認知度を高め、海外の所蔵先等と広く意義・活用法を共有し、日本文化研究の新局面を創出した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the Edo-period literary genre of tanka poetry, a rich historical source for investigation into the culture of early modern villages, with the goal of sharing its findings with European institutions possessing significant collections of historical materials. The reasons that kyoka are considered important historical sources are: the fact that a rich cultivation exists as a background for the creation of the poems; the fact that kyoka writers used a national network to bring multipurpose human and material resources to local regions.
This study will heighten awareness of the cultural significance of the diverse range of kyoka historical source materials and share widely their significance and practical methods of using them with overseas institutions possessing kyoka collections, representing work with scholarly significance in its establishment of a new phase in the research of Japanese culture.

研究分野：日本思想史

キーワード：狂歌　近世後期　地域　文化　連

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

18 世紀後半の天明年間に江戸でピークを迎えた「狂歌」は次第に享受者を地方に拡大し、19 世紀に至ると「判者」（撰評・教授有資格者）が地方の村々に点在するほどになった。彼らは地域において「連」を組織し毎月の定例会（「月次会」）で地域の狂歌人の作品を添削指導するとともに、江戸に本拠地を持つ全国組織「側」の毎月の作品集（「月次集」）への応募を促し取りまとめを行った。こうして「狂歌」の全国ネットワークが確立していったが、そのネットワークを支えた地域の狂歌人の実態については未解明な部分が多い。

その主な理由は、(1)狂歌人が本姓名ではなく「狂歌号」を用いるために個人を特定することが難しいこと、(2)近代に至り「狂歌」への関心が減衰し「月次」の作品集の作成が激減したこと、さらには(3)「月次」という定例の制作行為を文学的観点から否定し価値なきもの（「月並」平凡）として葬り去ったことにある。

これによって、「狂歌」や狂歌人が江戸時代の社会とりわけ地域社会にあって果たしていた「文化的機能」への検証の道が閉ざされ、狂歌人のもとにあった諸種資料は価値を見いだされないまま散逸の憂き目を見た。

ところが、狂歌人の多くは地域の「文化的なリーダー」であり、「読書人」・「蔵書家」であることが多く、地域の文化状況を把握するキーパーソンであることが一般的である。というのも、「月次」（毎月の制作）を特徴とする 19 世紀の「狂歌」では事前に「兼題」と呼ばれる歌題が提示されており、作品制作段階で広範な「書物」が参照され作品に取り込まれていた。その「書物」こそが、当時隆盛を見た出版資本が提供した出版物「板本」なのであった。狂歌人は諸種「板本」を江戸から取り寄せ確保するとともに、地域民に蔵書の閲覧を許したりしたのである。狂歌人が文化リーダーであり蔵書家であるとは、その意味からである。

したがって、「狂歌」や狂歌人を手がかりとすることは地域の文化状況把握の一要諦なのであり、狂歌人のもとにあった蔵書の分析は彼らの学問状況・思想状況の正確な把握の基盤たりえる。また、散逸の進む地域文化資料の確保や保存を効率的に推し進める糸口も、狂歌人の発掘から始まると言っても過言でない。

本研究の担当者は、『江戸の転勤族ー代官所手代の世界ー』（平凡社、2007 年刊）において江戸幕府の代官所の所在地を中心に地域文化の形成に関わる代官所下級役人のありようを論じ、平成 18～22 年度科学研究補助金（基盤(C)）を通じて「天領」（幕府領地）の文化・思想形成に検証を加えた。それによって実姓名が判明し、生業や活動の実態が把握可能となった狂歌人は複数にのぼり、彼らが地域文化の形成に関わった具体的な場面を紹介することが可能になった。たとえば、「天領」が多く存在した現福島県域においては、「狂歌」の「判者」であった代官所役人が「連」のネットワークを通じて全国に地域文化を紹介したこと、傘下にある地域の狂歌人ともども地域文化の再編に関わったことなどが明らかになったのである。同様にして、「代官所」のあった飛騨高山の文化的基盤についても従来指摘されてきたものとは異なる局面を解明した。

一方、従来から一般的な保存の処置をとられつつも、その意味や価値が不分明なまま未活用であった狂歌関連資料をめぐって、調査時に史料的な意義を説明し、地域での利用を促すとともに保存方法の工夫を求め、それに応じて「町興し活動」を開始した市町村や保存整理方法の変更を行った公共機関や所蔵者が現れた。例えば新潟県上越市直江津・同三和区神田などである。

本研究が目指すのは、これまで主に調査対象としてきた「天領」に加えて、商業地などの都市部や農村・山村・漁村等に調査地点を拡張することであり、地域文化の特色を学問形成・思想形成の側面を中心に検討することである。その際の重要指標として「狂歌」を位置付け、地域個々の特色を「狂歌」に即して精密に議論することを目的とする。

他方、「狂歌」の作品集（「狂歌本」）の中には挿絵等に色摺りの部分があるもの（いわゆる浮世絵）が少なくない。近代に至り、そうした「絵入狂歌本」に注目し蒐集したのがオランダ・フランス・アメリカをはじめとする海外のコレクターたちであった。そのため「狂歌」に関連する「書物」さらには関連する印刷物「摺物 SURIMOMO」の有力な所蔵先は海外にある。ところが、海外では「狂歌本」「SURIMONO」は専ら美術研究の対象と位置付けられ、歴史的な観点さらには地域文化史的な観点からは検証されてはおらず、「狂歌」の「社会史的な意義」についての視点を欠く。

担当者は国際浮世絵学会の機関誌『浮世絵芸術』160(2010）に掲載された論文において、狂歌と浮世絵との関連、浮世絵師と地域文化との関連に言及した。

本研究においては、本研究が採用する社会史的・文化史的な視点の有効性を表明する意味をかねて海外（特にオランダ）での調査・報告を行うことを重視し、「狂歌」「SURIMONO」を通じた日本文化の紹介を目的の一つに加えたい。

２．研究の目的

地域の文化状況を把握する際に「狂歌」ならびに狂歌人に着目することが有効であるという本研究の基本視座は、歴史学と文学という二つの異なる研究領域の重複部分において成立する。

また、「SURIMONO」に代表される「狂歌」関連出版物の重要部分に浮世絵師が描く挿絵のような絵画資料が存在するという事実への接近は、文学と美術史学の連携の上で成り立つ。一方、狂歌人の作品制作のバックグラウンドに和・漢の広範な「書物」が控えているという事実の意義を解明するためには、文学と思想史学の研究成果の相互乗り入れが必要となる。

なお言えば、19 世紀の狂歌人は「知識」の拡充過程で国文法を含む江戸期「国学」・「考証学」の成果を吸収し、古典研究・日本思想の専門家となる者が少なくなく、幕末の変革に関わるものも現れた。狂歌人の思想形成の問題は、政治史・思想史の領域の中心テーマにすら踏み込むことになるのである。

従来あまり聞きなれない「狂歌」を取り上げ、それを指標として地域の文化事情に迫ると言うことは、歴史学・文学・美術史学そして思想史学の研究の横断的総合につながる。本研究ではそれを「文芸社会史」の名のもとに解明する。

のみならず、自治体史の項目執筆者などの地域研究者から研究情報の提供を受け、資料の所在を確認し閲覧する。その上で研究情報の共有をはかり、資料保存の道筋を提示することは、地域調査研究の連携的な手法の提起の意義をも有する。

上記の視座に立って、本研究においては、「狂歌」や狂歌人に関わる出版物・文献・史料の把握をめざすべく基礎的調査を行い知見の総合化を行い、「狂歌」を「地域文化人を発掘する際の指標・ツール」に用いること、ツール化することを宣揚する。

すなわち、

(1)　地域の狂歌人に接近する調査方法・技術の確保・拡充を行う。あわせて、武士であり商人であり農民であるような狂歌人の社会的な実態に迫る。具体的には、「狂歌」関連文献のうちには一般的な史料には見られない「伝記的な記述」が散見する。加えて、「狂歌本」においては確実に作品を取りまとめ発送する必要性から「居住地」が正確に記されている。その伝記的な記述のデータベース化、さらには居住地の可視化（マッピング）、地域狂歌人の数的把握を行う。

(2)　「蔵書家」であることが確認される狂歌人については、蔵書の質的な特色を明らかにする。儒書・仏書・歌書などといった書誌的な把握はもちろん、「書物」の入手先を含む個別書籍が含む情報の把握につとめる。可能であれば「蔵書目録」の発見を目指す。

(3)　地方の狂歌人は村落における中心階層に属することが多く、従来、彼らの多くは専ら政治面での動静が把握されてきた。しかし、一方では「狂歌」に見られるような文化面での貢献もなしてきた訳であるから、そうした政治面・文化面相互の関わりを総合的な伝記的事実として把握に努める。加えて、江戸期の狂歌人のなかには明治に至り地域の「短歌」界をリードした人物も存在する。換言するならば、地域社会の全体構造のなかに占める狂歌人の同時代的・近代的意義を明らかにする。

(4)　もちろん、全国に展開する「狂歌」の学問的・文化的環境を検証し評価することは、一研究者の短期間の研究では困難である。しかし、研究担当者が調査の過程で入手した「四方側」（19 世紀の狂歌界にあって最大勢力を有した鹿津部真顔の率いた「側」）の「判者」・「准判者」をめぐる複数の名簿を活用すると、狂歌が展開した「歴史」と「地域」の可視化の基準を設定することが可能になる。それは、本研究の調査地点を設定する際の目安となる。

(5)　これまで十分には活用されてこなかったそのような「狂歌」の基礎資料を携えて全国の有力地点に赴くならば、有効な地域調査を実施することができる。のみならず、本研究の担当者以外の研究者・同好者でも同様な調査は可能となり、「ツール化」を果たすことになる。

以上、本研究が目指すのは、江戸後期における地域の学問・思想・文化の構造さらには地域の住民の文化への取り組みの全体像の把握である。それは「文芸社会史」研究の集大成と言っても過言でない。

そのことを通じて、これまで主に思想史分野で解明されてきた学者や思想家の学問的な営為とそれらを「受容・享受した人々」との相関関係に言及し、江戸後期の学問・思想の社会的な特色と意義を明らかにすることを最終的な研究目標としたい。

（補足）本研究の学術的な特色

従来、江戸後期の「地域」の学問・文化の展開については、藩校や郷学などに目が向けられ、笠井助治『近世藩校における学統学派の研究』など、かなりな程度の研究蓄積がある。しかし、そこで主に把握されたのは専門的な学者や思想家の学問的営為が中心であり、藩政改革・維新変革などの政治動向との繋がりを求めるものが大半である。地域における学問や思想の幅広い「享受者」への検証は将来的な課題とされてきた。また、いわゆる「庶民」の思想・文化の受容については研究対象の設定の恣意性が問題とされ、検証を消極的に評価する向きもあった。

(1)　本研究があえて「月次」の語に象徴される恒常的な文化行動をともなう「狂歌」を研究視座に掲げるのは、従来の思想史研究・地域文化史研究が扱いかねた地域に根ざし生活した広範な「学問者」への検証を行うためであり、検証の過程で学問や思想の有する社会的な機能を幅広くすくい取るためである。本研究の独創的な点を掲げるとすれば、従来ややもすると「平凡」さらには「旦那芸」などとして消極的に処理されてきた地域の「学問者」に対する多岐な検証視点を設定したことにある。同様にして多様かつ流布の数量が多いため扱いかねた「板本」のような平凡な出版物を「蔵書家」というような出版史・社会史的な観点から再評価しようとする点にも特色がある。

(2) 「地域」を扱った地方自治体史にあって「文化」の領域の占める比重は低いのが実状である。それは、先述のような細分化された学術研究や個別分断的な地域の検証の仕方と不可分であり、地域が学問や文化の総合的な展開の「空間」として位置付けられてこなかったこと、地域における「知」の営みが一部の例外を除いては閉鎖的に展開したとする低評価、さらには全国的な文化・思想潮流との接点を求めかねたことなどに起因する。

今後の地域研究にあっては、そうした地域文化研究をめぐる負の認識に意識的に変更を加えることが不可欠と考える。実際に本研究に関連する調査報告を行ったことにより地域文化を指標とした町興し活動の活性化がなった例がある（宮城県大崎市）。本研究は地域住民の「文化にまつわる意識の固定化」を打開する可能性を有する。

(3) なお、本研究の基本的な視座はフランスのアナール学派の「書物の社会史」研究に連なるもので、同様の関心は近年、中国、韓国などの東アジア諸国で高まっており、特定領域「東アジア出版文化研究」のプログラム以後、分担研究者として国際協業を行ってきた。また、山東大学（中国）のように、書物研究を国家的な文化プロジェクトに高めようとする試みと連繋するものである。本研究はそうした書物研究をめぐる国際的な比較研究の場面に確たる視点を提供するものであることは言をまたない。

もちろん、主たる当該分野である日本思想史学の研究分野に対して、史料的な制約の改善や研究領域の拡大をもたらすものであると確信する。

３．研究の方法

「地域調査」に主眼を置き、研究成果の地域への還元を目指す本研究が採用した研究方法は、大きく(1)史料の収集・調査とそこで得られた史料のデータベース化と、(2)各種文献の読解・検討である。その際の史料とは、歴史資料に限定されるものではなく、文芸史料・美術史料など広範な「文化史料」である。

その際、中心に据えたのは、定期的に刊行される「月次」にまつわる出版物「月次狂歌集」と関連する諸種「摺物 SURIMONO」である。

そうした史料を調査地域に赴き発見・調査し、可能であれば購入する。また、その史料的な価値・意義を既存の学問領域に照らして再確認するばかりではなく、地域文化の新たな学問領域としての「書物文化研究」を模索すべく、多様な評価基準を設定した。その評価基準作成にあたっては海外における研究動向を取り入れるとともに発信する。

もちろん、地域の歴史性・地域文化の独自性などについては既存の自治体史などの記述には見入るべきものも少なくなく、それらの上に新たな知見を付け加えることを眼目として、地域歴史研究者との交流を図り、史料情報を獲得する。

年度による作業上の差違は基本的には無かいが、新規に史料を見いだした際には可能な限り現地に赴き史料の意義と恒久的な保存の必要性を説明するなどして、調査に重点を置きつつも社会への研究の還元をめざす研究方法・研究発信方法を模索する。

４．研究成果

本研究は、「狂歌」に関わる人々が江戸期の地域文化の形成に果たした役割の多角的な検証を前提として、その研究方法や成果を可視化し地域調査の「ツール」として確立することに目的がある。狂歌人に代表される広義の「学問者」の「知」の構造を思想史的・文芸社会史的に考察し、日本中のどこの地域にも存在する文化人を発掘すること容易化することを目的としたのである。

「狂歌」に着目したのは、①「狂歌」が様々な書物等を前提とした幅広い教養の上に立って作成されていたからであり、②全国的なネットワーク（「側」）を通じて狂歌人が地域に多様な人的・物的資源をもたらしており、地域文化形成への貢献度が高いからである。

こうした「狂歌」や狂歌人についての検証から導出された知見は、江戸期の地域文化の再評価のみならず、現今の地域社会再編成の潮流に文化面での視座を提供するものである。そして、狂歌の「月次集」と関連する「摺物 SURIMONO」の分析による文化拠点・中心人物の解明は地域文化研究の新たな視点提供を意味した。

本研究が重点的に調査を行った地域は、新潟県上越市直江津地区・神田地区（平成 28 年度～令和１年度）、山形県天童市（平成 29 年度）、宮城県大崎市（令和１年度）であり、「狂歌」関連出版物の所蔵機関調査は二川本陣資料館（令和１年度）で行った。

また、研究成果の途中段階での報告は下記の学会・研究会で行ったが、重点調査地域で報告会を随時設定した。さらに、ヴェネチア（イタリア）、ライデン（オランダ）、パリ（フランス）等で「狂歌」関連文献の調査を行い、「狂歌」についての知見を周知すべく担当学芸員に啓蒙的な資料解説を行った。これらにより今後同種の調査・研究を行う際の基盤作りを行うことができた。

「狂歌」研究が遅れている中国においては、研究の活性化を図るべく山東大学において

学生に講演を行い（平成３０年度）、文献調査を通じた研究協力体制の構築を図った。同様にエドヴェシュ・ロラーンド大学（ハンガリー）においても講演活動を行った（平成 29 年度）。

特に研究の最終年度であった令和１年度には、本研究の成果をまとめ、成果を公開し「狂歌」研究の意義を発信すべくし、宮城県大崎市松山に所在する羽黒神社の「狂歌額」を同市教育委員会・地域史研究者と協力して調査し、東北歴史博物館において詳細調査を行った。この活動を通じて参加者から新たな地域情報を得ることができた。

関連した報告会を地域史研究者の研究報告会（東北大学東アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門研究会）で行い（令和１年度）、宮城県大崎市で開催する市民講座で講演することとした（新型コロナウィルス関連で中止）。

また、調査とともに史料保存活動を行った新潟県上越市三和区神田富永邸においては所蔵の「狂歌」関連屏風（狂歌短冊を多数貼り付けたもの）の保存処理を監修し、完成を記念した行事において講演会を開催し、同屏風を地域史資料として活用する運動の立ち上げに繋げた（令和１年度）。

江戸時代は世界的にも稀なほどに「出版文化」の花が開いた時代とされ、多様な分野で各種書籍が出版されたが、なかでも本研究が重視した「狂歌」をめぐる出版は浮世絵を含む多岐な出版分野と連携しつつ展開した。欧米で研究の盛んな「摺物 SURIMONO」はそうした出版活動の一部をなすものである。それらの広義の「出版物」を地域の狂歌作者たちは活用し、保有していた。

本研究においては、「狂歌（特に 19 世紀の狂歌）（俳諧歌とも呼ぶ）」が、江戸との繋がりを有する地域の知識人がこぞって制作したものであり、日・中の古典さらには地域的な景物、日常的の些事に至るテーマを幅広くかつ「典拠」をもとに詠んだことを実証的に明らかにするとともに、地域に住む狂歌作者のうちの中心となる人物を多数発掘した。

彼らが狂歌作品を制作する際の典拠としたのが出版中心地･江戸を中心に生産された「書物」であり、まさに「狂歌」は「書物」に支えられ詠まれた。さらには浮世絵などの出版物も大いに参照に供された。そうした有り様を、「狂歌本」「狂歌摺物 SURIMONO」の実物に即して検証し、その実態を明らかにし、既知・未知の資料を多く入手し今後の研究の素材を確保した。

このような本課題の研究成果のおおむねは、出版をテーマとした「書物出版と社会変容」研究会をはじめとした国内の研究会のみならず海外で開催された研究集会で報告を行い、また隣接する研究領域の研究者に史料的な意義を説明し、歴史的にも学問的にも認知の度合いが高くなかった「狂歌」の地域文化形成に果たした役割さらには「狂歌」を用いた地域文化人の発掘方法の「ツール化」という本研究の研究視座への学問的・社会的な了解が高まったと確信する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 高橋章則	４．巻 25
２．論文標題 「得月楼蔵書目録」2種　ー蔵書の目録化と蔵書空間ー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 書物・出版と社会変容	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 高橋章則
２．発表標題 歌川広重「魚尽」シリーズの成り立ちー俳諧歌（狂歌）関連資料の時系列化が導き出すことー
３．学会等名 第124回「書物・出版と社会変容」研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋章則
２．発表標題 狂歌関連史料の時系列化
３．学会等名 「東北大学　日本学学際研究プログラム」ワークショップ（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 高橋章則
２．発表標題 文芸社会史の技法ー文芸資料（狂歌）を歴史資料化するー
３．学会等名 上廣歴史資料学研究部門研究報告会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考